令和５年度「教職課程担当教員養成プログラム」活動報告

安藤　和久（広島大学）

１．はじめに

広島大学大学院教育学研究科教育学習科学専攻（教育人間科学専攻（博士課程後期）は、平成 19 年 9 月から平成 22 年 3 月にかけて、「Ed.D 型大学院プログラムの開発と実践～教職課程担当教員の組織的養成～」（平成 19 年度文部科学省大学院教育改革支援プログラム）に取り組んだ。同プログラムでは、①確かな研究力に加え、大学教育において実践的な指導力を発揮できる人材、②高等教育を含む教育臨床に的確に対応できる人材、の育成が目指された。同プログラムは、将来、教職課程を担当する大学教員、すなわち「先生の先生」を組織的に養成しようとするものであり、これまで研究者養成に特化してきた大学院教育の在り方を見直すものでもあった。

以上の目的を引き継いで、同プログラムは平成 22 年度から「教職課程担当教員養成プログラム」（以下、教職Ｐ）として実施されている。本章では、本年度の活動を、正規教育課程に関する部分を中心にして概述する。

２．大学授業構成論講究・大学教員養成講座

令和 2 年 4 月の大学院改組に伴って教職 P のカリキュラムも変更され、「大学授業構成論講究」と「大学教員養成講座」の履修が教職 P の履修要件となった。前期の「大学授業構成論講究」では、教員養成の歴史・制度を学ぶとともに、「教職科目」のシラバス分析などを行う。後期の「大学教員養成講座」では、大学での教授法やカリキュラムに関する基礎的な理論に加えて、大学教員が講義資料を配布する際に考慮しなければならない著作権法などを学び、大学教員として就労するための基本的な事項を身につけることとなる。「大学教員養成講座」は、広島大学の三階層制 TA 制度の三段階目に当たるティーチング・フェロー（TF）の要件となっていることから、人間社会科学研究科以外の受講生も多い。教職 P の活動を通しては、これまで同プログラム履修生の中での交流が主であったが、本講座を通して他研究科の院生と交流の機会が増えていくこととなった。

３．教職授業プラクティカム

「教職授業プラクティカム」は、履修生が TA として講義・演習等に入りながら、最終的に 1 回のコマを担当する「教壇実習」をメインとした科目である。教育の補助者から仕手へと立場を変える中で、慣れない“責任ある”教育実践者としての立ち回りを要求される。プログラム履修 2 年次において広島大学開講科目で前後期にそれぞれ 1 回、3 年次には他大学で 1 回の計 3 回教壇に立つ。

加えて、事前に授業検討会を設けて、1 時間程度はその指導計画案について吟味する（事前検討会）。検討会には授業提供教員と TA 指導教員（一般的にメンター教員あるいはファシリテーターと解される存在）、他のプログラム履修院生が参加し、授業の目的や資料の適切性、時間配分、なぜその教育方法を採るのか、などが話し合われる。履修生は教壇実習当日までに、検討会で指摘された事項をもとに、指導案を修正することになる。下表は本年度に実施した教壇実習の一覧であるから、参照されたい。

教壇実習を終えた履修生は、事前検討会と同様のメンバーとテーブルを囲み、実施後の授業検討会を行なう（事後検討会）。自身の実習についての振り返りを行ない、次の実習に活かす。

表　プラクティカム日程一覧

	No.	実習実施日	実習生	授業名	題材・内容
前期	1	5 月 8 日	A	道徳教育指導法	道徳的葛藤等を用いた話し合い授業の原理
	2	5 月 23 日	B	教職論 (岡山理科大学)	教職観の変遷
	3	6 月 19 日	C	教育原理 (福山平成大学)	子どもと環境
	4	6 月 21 日	D	教育の思想と原理	政治と教育（西洋編）
後期	5	10 月 20 日	D	西洋教育史Ⅰ・Ⅱ	人々はなぜ知識を求めたのか？
	6	11 月 22 日	A	教育哲学Ⅰ・Ⅱ	「教師の倫理」論文の検討
	7	1 月 22 日	E	教育方法・技術論および情報活用教育論	学習指導案の構想と学習評価・授業評価のための情報活用

４．教職教育ポートフォリオ

3 年間の取り組みは、授業理念の形成によって締めくくられる。授業理念そのものは履修のどの年次からでも抱いておき、各々で磨いていくべきだが、それをまとまった文章にする機会として「教職教育ポートフォリオ」の作成が課せられている。

ポートフォリオの授業では担当教員の指導の下、授業理念（あるいはティーチング・フィロソフィー、教授哲学と表記する者もいる）を推敲し、完成させていく。また、理念を記すにあたってエビデンスとなる成果物を、ポートフォリオに整理して蓄積する。同ポートフォリオは、履修生のこれまでの学びの履歴を示す書類（learning portfolio）であるとともに、自分自身がこれまでの実習や研究を経てどのような大学教育・教師教育を展開できるかを示す書類（teaching portfolio）でもある。教職課程担当教員養成としてどうありたいか、そのためにどういったことを意識するべきか、自分の学んできたことはどう生かせるのか、これらが主要な記述内容となっている。

５．教員養成フラッグシップ大学への訪問調査

文部科学省により「教員養成フラッグシップ大学」に指定されている兵庫教育大学における教員養成の取り組みに関する訪問調査を行った。同訪問調査では兵庫教育大学教員養成・研修高度化センターの松田充氏に話題提供をいただいた。「自律した学習者を育てる教師の養成プログラム—アジャイル型手法を導入したカリキュラム開発—」を掲げ、どのような機関と連携・協働を行なっているのか、教職科目としてどのような科目を設置しているのかなど、今日求められる教育・社会課題に応える教員養成課程の創造についてのお話を伺うことができた。

同調査で得られた知見を手がかりとしながら、広島大学において取り組むべき教員養成とは何か、そして教職課程担当教員養成プログラムにおいていかなる教師を育てるのか、あるいはそのために必要な「先生の先生」としての資質・能力とは何か、を検討し、提起していくことが本プログラムの継続的な課題となる。